

## 芸備線ストロール⑤ 備後落合駅

### 「秘境のターミナル駅と 清張が泊まった宿」

先月はコロナ禍の第6波で休載、二カ月ぶりの芸備線の乗車である。3月14日の月曜日、車で比婆山駅まで行き、8時1分の落合行に乗った。乗車してすぐに、運転士さんから「木次線に乗り継がれませんか」と尋ねられた。雪が残っているので不通になっている。「落合までです」と答えると、

少し不思議そうな顔。車内には先客がひとりだけだった。広島県のまん延防止等重点処置が解除されたのが3月6日、今は青春18きっぷの利便期間（3月1日〜4月10日）、もう少し鉄道ファンの旅行者がいるかと思ったが肩透かし。時間帯や木次線不通の影響もあるのだろう。

発車してしばらく開けた平地を走っていたが、川と山麓に挟まれた場所に突入して、伸びた枝が窓を叩く音が聞こえてくる。以前に夏場に乗車したことがあるが、緑のトンネルの中を走っているようだと興奮した記憶がある。しかし、これだけ山が近いと、沿線の木の剪定や落ち葉の管理が大変だろうと正直、思ってしまった。

15分ほどで終点の備後落合に到着、料金は190円。「2、3番線」のプラットホームに降りる。待合室や屋根のあるホームを比婆山駅方面に進むと、すこし傾斜のある部分がある。「急行ちどり」が停車することになったために、ホームを延長して嵩上げしたのだという。

かつては、広島市（山陽）と山陰を結ぶ急行列車が走っていた。松江城の別名の千鳥城が由来である。帰省や帰京時には、「ちどり」のダイヤに合わせて予定を立てていた。4人ボックス席の客車は、いつも混雑していたという記憶がある。1990年にちどりという名前は時刻表から消え



てしまった。

ホームの端に立って山側を見ると、蒸気機関車（SL）が走っていた時の遺構がまだ残っている。転車台や石炭の積み込み施設など。転車台は、SLの最盛期には、拠点駅、終・起点駅には必ず設けられていた。両端に運転機関がある車両になって、必要がなくなった。

落合は地名ではなく、人や列車が落ち合う場所という意味。実際に、進行方向の異なる3車両が「落ち合う」時間帯がある。14時37分の新見行き、14時41分の宍道行き（2・8・11月を除く第2木曜日は運休）、14時43分の三次行き。この集合写真を撮



るために、全国の鉄道ファンが集まってくる、らしい。

ホームの階段を下りて線路を渡り、1番線のホームに上がった。駅舎の待合室が資料室になっている。かつてのSLの写真やポスターの中で、新聞の切り抜きが目に入った。日本経済新聞（2019年5月6日）の「無人駅私が守る」。その記事によると、備後落合駅が開業したのが1935年、最盛期には昼夜を問わず長距離列車が往来して、百人以上の職員が勤務していたという。しかし、97年に無人駅になってしまふ。

近所に住む永橋則夫さんは、三江線の廃線の決定に、このままでは芸



備線も危ないと、2017年の春からボランティアで駅前の雑草取りやトイレ掃除を始めた。永橋さんは、かつては国鉄の機関士だった。待合室の資料も永橋さんが用意したものだ。今では、落合駅の歴史を語る名物ガイドとして有名である。

駅舎の外に出たところで、永橋さん本人と遭遇。駅前にある旅館だった建物（1頁写真下）のエピソードを教えてもらった。大原旅館、鉄道全盛期には、正規の客室の他にも夜更けに到着した乗客が翌朝の列車に乗るまで仮眠をとる貸間があり、大いに賑わった。

この旅館に宿泊したのが社会派推理小説の巨匠、松本清張である。戦後は新聞社に復職していたが、生活が苦しく、副業として妻の故郷の佐賀で仕入れたほうきを中国地方や関西で売り歩いた。

「八畳ばかりの間の真中に掘りごたつがあり、七八人の客が四方から足を突込んで寝るのだ。」と清張は旅雑誌のエッセイに書いている。そこで、五十才ばかりの夫婦の会話を聞くのだが、「出雲の言葉は東北弁を聞いているようだった。」と結んでいる。

この体験が「砂の器」に生かされている。「出雲のこんなところに、東北と同じズーズー弁が使われていようとは思われませんでした」と主人公の今西刑事。謎解きの重要なキーワードになっているのである。

このエピソードは、2021年5

月28日に放映されたNHK「新日本風土記・松本清張昭和の旅」の中で詳しく紹介されている。永橋さん自身も出演している。

旧大橋旅館の前の橋を渡って、国道（183号と314号重複区間）に出る。駅前を流れているのは小鳥原川で、この川を境界線にして、駅側が西城町八鳥、国道のある反対側が西城町小鳥原だ。昨夜の大雨で水量が多い。

川沿いの国道を比婆山駅方面に戻ると、15分ほどで314号との分岐点に出る。川も分岐していて、314号線に沿って流れるのが西城川の上流、重複区間に沿って流れるのが小鳥原川である。分岐点の近くには「ドライブインおちあい」があつて、落合駅の名物だったおでんうどんを食べさせてくれるそうなのだが、当日は店が開いていなかった。

川沿いの183号線を比婆山駅に向かつてひたすら歩いた。川向かいに芸備線の線路が見えるのだが、土台が崩れて土嚢を積み重ねて支えている箇所がある（写真上）。2018年の豪雨被害だろうか。土嚢の黒いビニールカバーは苔むしている。

途中、休憩した河原の土手に、フキノトウが生えていた。曇天だった空も青空が覗いている。臺の立ったフキノトウを眺めながら、おでんうどんを食べ損ねたわたしは、てんぷらにしたらおいしそうだなと考えている――。



どら書房の店主が毎月オススメ本を3冊選んでご紹介します。

## 「赤ヘル1975」

重松清 著 講談社

広島東洋カープが初優勝した1975年、万年Bクラスの弱小チームの奮闘に熱狂する広島の街を舞台に、中学1年生の転校生のマナブ、同級生のヤス、ユキオの物語は進行する。まだ原爆の傷跡を抱えて生きている市井の人たちの複雑な想いを、直截な言葉ではなくその言動で、巧みにあぶり出している。説教臭くないのが、直木賞作家の技量なのだろう。



ほぼ同年代の作者が描く中学生は、山間の田舎町で育ったわたしが読んでモリアリティがある。外木場の快投や山本浩司のホームランに酔いしれた時間がよみがえる。広島県民、いや、カープファンが、市民球団に救われたのだ。

## 「結婚の奴」

能町みね子 著 平凡社

元男性で、性適合手術を経て戸籍も女性に変更した著者が、デブ専（太った男性が好み）のゲイの男性と同居するまでの経緯を、詳細に、そして能弁に語っている。著者は、これは「結婚ごっこ」だと冷静に分析している。40歳を前にして、一人暮らしの不便さや淋しさを解消するためだと、打算的な理由を正直に吐露。



著者は恋愛不適合者を自認していて、恋愛が介在しない同居者は、ゲイ男性しかいないという結論。普通の結婚生活を送っている世間一般の家庭に対しての憧れやコンプレックス、呪詛をも隠さない。否定も肯定もしない、今存在する自分の幸福を追い求める、現代の私小説である。

## 「どろろ」

手塚治虫 著 秋田書店

古本屋にはいろんな本が集まってくる。子供の頃に少年サンデーの連載で読んでいた「どろろ」のコミック本、懐かしくてページをめくると、たちまち当時の興奮が思い起こされる。背景は空町時代、父親の野望のために、貢物として魔物たちに肉体を奪われて生まれた百鬼丸と、野盗のこどものどろろのコンビが活躍する。



手塚漫画では異色の陰画のような暗い絵柄が印象的。百鬼丸が魔物を倒す度に、奪われた肉体が戻ってくる。どろろの回想で、母親が炊き出しの粥を器がないので素手で受け取ってどろろに食べさせる場面は鮮明に記憶に残っている。手塚作品では一番好きな漫画である。

「ぐんぐん伸びよう会」(教室：川西町 241 連絡先：080-3631-9125 やない)

当教室では、一人ひとりに合った学習(ちょうどの学習)をし、**年齢・学年に関係なく、生徒ができるところから始める学習法**です。**対象は、乳幼児～小学生。**

教室とご家庭との二人三脚で**子どものもっている可能性を伸ばしていきましょう。**無料体験受付中！！

0~3歳：4800円(週1回)。4歳~小6生：算数・国語(各5500円、週2回)。お気軽にご連絡くださいね。



庄原の不確かな歴史ドラマ——永江の庄から現代まで③

## 山内首藤の勢力範囲は

### ——山名と首藤の抗争の地はどこか

音谷健郎

山深い庄原市内の山沿いには、いくつもの大きな城跡が残っています。中国山地を挟んで、山陽側の毛利、山内首藤勢と山陰側からの山名、尼子勢の勢力争いの置き土産と言えそうです。まさに、「兵（つわもの）ど

もの夢の跡」です。

山内首藤の本拠地、庄原市山内から始めます。山内首藤は、律令制の土地を維持するために任命される守護大名ではなく、武士階級が力を持ち室町以後に出てきた戦国大名です。



①山内本郷の甲山城頂上付近。「東郭」「西郭」の標識があり、城跡が両腕を上げたように広がる



②甲山城の遠景。庄原—三次を結ぶ国道183号付近からも見える

関東の鎌倉あたりで力を蓄え、鎌倉時代末期、庄原方面に進出して来ました。

この地方は、それまでも小領主が覇を競っていました。みるみる凌駕しました。山内首藤の消長に詳しい『庄原市の歴史 通史編』（2005年刊）によると、戦国時代に入り、御家人（山内首藤たち）の勢力拡大が進み、荘園内の紛争は領家（荘園の所有者）へ訴えるのが普通だったが、このころには幕府に訴えるようになり、「領家の支配力の低下ぶりがわかる」とあります。

こうして領家は、武力を持つ山内首藤氏の干渉には抗しきれなくなり、地毗（じび）荘本郷の年貢徴収を請け負わせるといふ譲歩をします。14世紀半ば、「山内通資」の時に、山内の本郷に甲山城を築き、地毗荘や信敷荘を拠点にして庄原、比婆郡方面の経営に力を注ぎます。15世紀末、「備後国守護代」に任じられ、安芸毛利氏と並ぶ戦国大名に。山内首藤氏については、前記『庄原市の歴史』が、山内首藤氏の地域経営を微に入り細に入り、専門書を凌ぐまでに詳述していますので、私の記述は省略します。

やがて、毛利氏の勢いが圧倒し、

山内首藤氏は1591年、毛利氏の配下となって広島に移り、関ヶ原合戦に加わって破れ、萩に移住します。

一方、西城の市街地の入口に腕を伏せたような大富山（おおとみやま）がそびえています。備後南部で力を蓄えた宮氏が東城・久代から進出して来て、ここに城を築いたのです。五代60年間、ここを拠点に東城、西城を支配します。頂上の案内板には、「庄原市史跡」と銘打ち、事蹟を紹介しています。

「築城以来、毛利、尼子両勢力の中に介しながらもよく勢力をのばし、大いに郷土発展の基を築いた大富文化の花を開かせた」と。「毛利、尼子両勢力の中に介在し」とは、山内首藤氏が毛利方にと旗幟を鮮明にしたのとは違って、宮氏は毛利、尼子の両勢力の間で、揺れていたことを物語っています。

山内首藤氏と久代宮氏は、庄原以西と西城以东に、勢力範囲を棲み分けていたように思えます。

庄原の歴史の先駆的な書『永江庄から庄原町へ』（1949年刊）では、「首藤が山内本郷に移って、威を張ったことも、久代の宮氏が東城西城を統治していたことも、庄原の土地には、あまり関係はなかったようであ



③西城の大富山の頂上。西城の市街地が一望できる



④大富山の楽しい案内図

「尼子、毛利の勢力争いも取り立てて言うほどのものでは、なかったようであった」と、呑気に構えています。これ即ち、戦後ほどなく発刊されたこの書の後で、郷土史発掘が長足の進歩を見せたことを物語っているのだと思います。

ところで、県史跡に指定されている甲山城跡を訪ねて見ました。菩提寺の円通寺（国重要文化財）の境内から地続きの甲山城は、小山を丸々利用した山城です。落ち葉に埋もれた急峻な山道を10分あまり登ると、「西郭」「東郭」の標識と共に踏み分

け道が左右に分かれます。ここからが本格な城塞です。城域は、750坪×600坪とあります。

ただ、あたりは痩せた雑木林ばかりで鬱蒼たる大木は見当たりませんでした。城域の広さは、吉田・毛利勢の郡山（こおりやま）城に迫る勢いです。ここを根城に安定した山内首藤氏の勢いが、納得出来ました。

次に、西城の大富山城も訪ねてみました。落ち葉が堆積したきわめて急峻な細道をたどること40分。城跡と思える頂上は、広くはありません。周りにいくつもの「郭をめぐらせ」

と説明板。ここは、尼子勢に攻められたことがあるが、寄せ付けなかったのです。

帰途は、中腹にクルマのわだちのついた広い道があったので、これ幸いと辿ったら、西城市街地の西の端の「栗（くり）」に導かれました。

両史跡の案内板を読みながら、「郷土の歴史」と気軽に口にするもの、先人の導きがなければ、何一つ分からないことを痛感しました。

次回は、「福島正則は傍若無人だったのか」について調べてみます。

### ◇どら書房郷土資料本コーナー◇

郷土史関係の本や地元で出版された本、地元の方の作品集（短歌俳句小説等）、地元に関係する本を揃えています。非売品で閲覧&貸出（無料）しています。寄贈も歓迎します。

### どら書房 委託販売コーナー

#### ★「天馬書林」

新書の教養書や人生指南本、ノンフィクションが充実。

#### ★「サワちゃん文庫」

中国、日本の歴史書、思想書が中心のラインアップ。

各専用棚で好評販売中！

「植物画とは何か  
—日本の植物図譜を中心に—」(5)

小野蘭山に本草学を学んだ岩崎常正は本草学者の道を選ばず、恵まれた画才を生かして、まず、「武江産物志」を1824(文政7)年1月に著す。これは江戸日本橋から半径およそ七里半の範囲に産する動植物目録で図はない。そして、1824(文政7)年12月は「日光山草木之図」を完成させる。これは日光採薬の際、持ち帰った植物を育て、草本166種、木本110種、計276種の写生図250ばかりがつけられている。

「日光山草木之図」を完成してから4年後、1828(文政11)年に「本草図譜」96巻92冊が完成する。これは20余年の歳月をかけて山野で見つけたものを写生し、また、自園へ移植して観察し、写生し彩色を加えたものもある。それらの植物はおおよそ2000種に及び、それぞれの植物には簡潔な解説をつけているから、日本最初の大植物図譜といえる。「本草図譜」としたのは、「本草綱目」の配列に従い、最初の4巻を水・火・土・金部に当てることにして、植物は巻五以降とし、「本草綱目」草部の配列に従って山草類から苞木類に配列し、96巻92冊にまとめたから、草木図譜と書名をせず、「本草図譜」としたといわれている。水・火・土・金・禽獣虫魚なども図にする意図があったが、果たされなかった。原稿が完成してから2年後の1830(天保1)年に、巻五～巻八(草部山草類)、巻九・十(草部芳草類)の6冊が江戸の須原屋茂兵衛と山城屋佐兵衛が木版印刷し、配本された。残り86冊は灌園の原本(宇宙一本岩崎必究の印がある本)を画家に模写させ、予約者へ10冊を一帙として予約者に配布した。

52冊(巻五十六、菜部芝栴類)を予約者に配布した1842(天保13)年1月29日に岩崎灌園が57歳で死去したので、残りの40巻は、常正の男、岩崎信正と門人小山広孝が校正しながら配本し、1844(弘化1)年8月に96巻の配布が完結した。奇南香樹・沉香樹(巻八十、香木類)、丁香(てうじ)、鶏舌香(巻之十一、香木類)などは日本に自生していないから、それらは蘭学者であった宇田川榕庵(1798～1846)の手許にあったヨハン・ヴィルヘルム・ヴァインマン(1683～1741)の「花譜」の図を模写しているから、丁香など外国産25種の出来映えはあまりよくない。

岩崎常正は植物好きであったから実物をじっくり観察しながら独自の画風で描き、余白にその植物の形状などを記載し、本草綱目の修治・気味・主方・

著者紹介…一九三一年、比婆郡(現・庄原市)比和町に生まれる。農学博士(九州大学)。昆虫や動植物などの自然科学、郷土史や民俗学を含めた博物学の研究者で、著書は多岐にわたる。

※中村さんの回想録的なコンセプトで編纂された「虫と草木と人びと」(シンセイアート出版)から、著者の許可を得て、その一部を抜粋、転載しています。



図2 さんかくそう

(ミスミノウ、本草図譜総合解説第1巻による)



図1 及己

(ヒトリシズカ、本草図譜総合解説第1巻による)



図3 芍薬  
(シャクヤク、大場秀章著「植物学と植物図」による)

附方に関する記述は全くなく、植物図譜そのものである。

及己ふたり志づか(図1)は、本草図譜巻八(山草類)十帖の裏に描かれ、?耳細辛さんかくそう(図2)は巻八(山草類)11帖の表へ描き、見開きになっている。図1を見ると、ふたりをひとりに訂正しているが、これは山本世孺(せじゅ、亡羊、1778~1859)によるという。山本亡羊(ぼうよう)は1793(寛政5)年6月、小野蘭山の塾に入門して本草学を修めた後、京都でたびたび物産会を開き、「秘伝花鏡」の講義を行った本草学者であった。

芍薬(図3)は巻九(芳草類)十一帖の裏へ花を描き、十二帖表へ、花に続く花茎を描く構図となっていて、やはり見開きとなっている。芍薬と漢名を記し、その下に和名をゑびすくさ延喜式と記している。シャクヤクは薬草として延喜式の規定で貢進されていたので、和名を延喜式に従って、ゑびすくさとしたのである。薬草として貢進されていたのはシャクヤクではなく、山野に自生しているヤマシャクヤクで、岩崎常正が「元漢種なり」と記しているように明代にシャクヤクは中国から渡来した。

## 「つれづれ歌談」②②

松岡初枝

いよー待つてました、と言いたくなるようなエピソードといい、知名度といい、万葉を彩るビツクな二人の歌です。

・あかねさす紫野行き標野(しめ)の( )行き野守りは見ずや君が袖振る 額田王(ぬかたのおおきみ)  
・紫草の匂へる妹を憎くしあらば人妻ゆゑに我れ恋ひめやも  
大海人(おおあま)皇子(後の天武) 時は天智朝、蒲生野(がもうの)での薬草獵(がり)の時のこと、二十年近く前に恋人だった二人。二人は十市(とおち) 皇女という姫を生んだ仲ですが、今額田は大海人の兄天智帝の妃なのです。大海人は「額田ちゃん」と袖を振る。「野守が見たらどうするの」「だって今でも美しい君が好き



んだから」スワ焼けぼつくいに……。しかしこの歌のやりとりは獵の打ちあげの宴での祝(ほ)ぎ歌、酒肴の類でヤンヤの喝采「いよー御兩人」「帝、弟君もやりますね」「うむ昔の事よ」二人は四十近い中年だからこそその二首の明るい響とユーモアは流石に大人の恋歌です。

・山振(やまぶき)の立ち儀(よそ)ひたる山清水酌みに行かめど道の知らなく  
高市皇子(たけちのみこ)

山吹の花が咲く山の泉を汲んで、あなたを蘇らせたが、行く道を知らないのだよ。

山吹の花の黄と泉で黄泉(よみ)、この「あなた」は十市皇女です。十市は額田と天武の子。高市とは母異いの兄妹です。十市は天智の子大友皇子の妻で、壬申の乱では計らずも敵となった高市ですが、乱で大友は自死、十市も謎の急死を遂げます。高市は妹というより、恋人への挽歌のように詠みました。高市は天武の長子だが母の身分ゆえ立太子できない。十市も訳ありの子。「あかねさす」の歌の暫く後のできごとなのです。

(腹が減ったな)

川沿いの道を歩いているのだが、飲食店はおろか、ジュースの自動販売機も見当たらない。桜でも見に行くと、青春18きっぷを買って気ままな旅に出た。人がいないところに行こうと、山間の終着駅で降りたのだが、駅前にある桜の木はまだ一輪も咲いていない。標高が高いので気温が低く、開花が遅いのだ。

次の列車が出るまでに三時間余りの時間がある。せっかくなので駅から、駅前の道を歩き始めた。

論語の「四十にして迷わず」から、四十歳のことを不惑というが、四十を過ぎてまた無職になった。

(何をやってるんだらうな)

長続きしないのだ。そこそこ、対応力はある方だと思う。新しい会社に入っても、小器用なので重宝される。人当たりがいいので、人間関係も問題はない。傍から見ると、よろしくやっているのだが、何年も勤めていると息苦しさを覚えてしまう。新卒で入った会社を三年で辞めるときに、かわいがってもらった先輩から「転職は癖になるから気をつけろよ」と忠告された。「自分に合った職場なんてめったにないぞ。食っていくためには、自分が合わすしか

ないんだ」とも言われた。今はしみじみと、その通りですと降参する。(公衆トイレは……、あるわけないか)

トイレを借りられそうな民家も見当たらない。護岸の石垣に嵌め込まれたコンクリの階段を使って、川原に降りた。苔むした大きな岩があるので、その陰で気持ちよく放尿した。子どもの頃のことを思い出してしまう。実家が井草農家だったおれは

## 野良猫

こま

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

### 現代御伽草子 ⑥7

あきふゆひこ  
亜木冬彦

祖母がその男性用の小便秘器で用を足していた。アサガオの前に立って、モンペや下着をずらしてシャーッとやっている。今、思い返すと、どうやっていたのか不思議である。

まあ、平たく言えば吸収合併だな。わしがいた神社が取り壊された。それで失業してしまい、こうして野良猫になった」

「罰当たりなやつだな」

(のらこま……、ああ、野良の狛犬ということか)

「声が聞こえた。驚いて周囲を見渡したが、誰もいない。」

「その通り」

「わしの声が聞こえるのか？」

「二匹……、失礼しました。狛犬は二体いるはずですが、もうお一人は？」

「どうやら、目の前の岩から声が聞

いた。」

野山が遊び場で、あちこちに自分専用のトイレを作っていた。穴を掘って周囲を石や粘土で囲んだだけの簡単なものだが、後にそのことを友人に話すと、自分のテリトリーを見回

「こえてくるらしい。」

「誰ですか？」

りする野良猫と一緒に笑われた。

「アマルジャロウ、まあ狛犬だ」

「令和四年です」

「そうそう、作業小屋の一角に、男

「神社の前に置いてあるやつですか？」

「西暦で言ってくれ」

用のトイレが設置されていた。アサ

「普通はな。神社が合祀されて……、

「まだ三十年か。少し起きるのが早すぎたか」

ガオと呼ばれる丸い陶製の小便秘だ。

「それが現れた。」

「三十年も眠っていたのか」

「そうそう、作業小屋の一角に、男

「その通り」

「飲まず食わずで大丈夫なのです

「アサガオと」

「霊気を食べる。何か理由があったか？」

「成仏できない魂もな」

「アサガオと」

「成仏できない魂もな」

「成仏できない魂もな」

「アサガオと」

「成仏できない魂もな」

「成仏できない魂もな」

「アサガオと」

「成仏できない魂もな」

「成仏できない魂もな」



(成仏……)

「狛犬は仏様の使いでもある。数は少ないが、寺院でもわしの仲間が警備しておる。いつの間にか、筋肉馬鹿の仁王のやつに仕事を奪われてしまったがな」

「人間の魂も食べるんですか？」

「まずくて食べられたもんじゃあないさ。成仏できない人間は、死んでも生臭さが消えないからな。ただし、どうしてもと祈願されたら、我慢して喰ってやる。据え膳喰わぬは狛犬の恥」

今度ははつきり、笑い声が聞こえた。どうも、からかわれているよう

な気がする。

「ところで、ワンダという名前を憶えているか？」

小学生の頃に飼っていた子犬の顔がよみがえった。柴犬の雑種で、テレビアニメの「ワンダースリー」から取った名前だ。おれは三人兄弟の末っ子だったので、友達には自分の弟だと自慢していた。トラックに轢かれて死んでしまったときのショックが忘れられなくて、いまだにペットを飼うことができないでいる。

「よしよし……、じゃあ、目覚めの祝いの儀といこうか」

「うん？」

「かばんの中に良いものが入っているではないか」

カップ酒のことだとすぐにわかった。桜を見るときに飲むと持参した。

「飲めるんですか？」

「ちゃんと献じてくれるならばな」

二礼二拍手一礼。「かかとは合わせて背筋を伸ばす」、「お辞儀は手を腿の横に当てて、もっと深く」、「かしわ手は右手を少し手前に引いて、小指の指先に素直に従って、ワンカップの酒を恭(うやうや)しく岩肌垂らした。

「うーん、久方ぶりの酒は効くなー」

おっさんのような声を漏らして、

岩肌が心持ち赤くなる。

「よし、気分を盛り上げるかー」

突然、岩の周囲に生えていた灌木に、満開の桜の花が咲いた。

「凄い！」

たぶん、桜の木ではなかったはずだ。

「野良でも、わしはいちおう、神獣だからな」

笑ってしまった。

目が覚めると、石の上に置いたカップ酒の空の容器が見えた。下戸のくせに酒を飲んで悪酔いしたらしい。

(不思議な夢だったな)

アマルジャロウと名乗った巨岩は消えている。もちろん、桜も咲いていない。しかし、灌木の茂みの中で何かの気配がする。

「ワンダー！」

子犬が顔を覗かせた。鼻の周囲が白毛でハチワレしている。おれの顔を見上げて「クウーン」と啼いた。

抱き上げて、おなかの三日月形の痣を確認した。そのとき、生暖かい水流がおれの顔を直撃した。ワンダのおしっこだ。笑い声が空から降ってくるー。

FEBC 1566

Listen to His voice

☎180-8790

武蔵野局 郵便私書箱36号

キリスト教放送局

日本FEBC行

あなたによりそ

キリスト教放送局 日本FEBC

●AMラジオ1566kHz

毎日夜9時30分~10時45分

●インターネット放送

www.febcjp.com [スマホで聞ける!]

FEBCは旧新約聖書を神の言葉と信じ、使徒信条を告白する超教派のキリスト教放送局。選りすぐりの20以上の番組を毎日放送。無料聖書通信講座やメールによる相談も。

《PR 広告》

庄原FEBCの会

# 「旧暦」のカレンダーを見る

古川行洋



「菊祭りの菊人形（山形県南陽市）」  
（ウィキペディアより転載）

九月九日重陽（菊の節供） 昔、中国では奇数を陽の数としていたので、陽の極である九が二つ重なる九月九日は、大変にめでたい日とされてきた。始まりは、六朝（りくちょう）時代の桓景（かんけい）という人物にまつわる故事にちなんでいる。「この日に高い所に登り、菊酒を飲めば、

災いが避けられる」とし、菊は翁草（おきなぐさ）、千代見草（ちよみぐさ）、齡草（よわいぐさ）とも言われ、邪気を祓い長生きする効果があると信じられていた。それは、昔、河南省の南陽に甘谷（かんこく）があり、その山上にたくさん菊が生えていて、谷の途中の三十軒余りの家は山上より流れくる谷水を飲むた

め、上寿は百二、三十歳、中寿は百余歳、下寿は七、八十歳を保ったという伝説による。よって、この日に日本の花見のように、酒肴や茶菓子などを持って、家族や友達と連れだつて小高い山に登り、紅葉を眺めながら一日を楽しみ邪気を祓い、天と地の神を祀るとともに菊酒を飲むと厄払いになるという風習があった。こういった習わしが、飛鳥・奈良時代に日本に伝わって、宮廷の行事として

菊花宴が開かれるようになり、平安時代には重陽節として正式な儀式となり「観菊の宴（重陽の宴）」が盛大に催された。菊の花弁を浮かせた「菊酒」（注1）を飲み交わし長寿を祝い、「歌合せ（菊合せ）」（注2）が行われた。九月八日に菊の花に真綿をかぶせて、翌九月九日の朝、その露を含んだ菊の香りがする真綿で体を拭い、老いを拭い去り、若返りをはかった。菊の露がしたり落ちた谷川の水を飲み長寿を保ったという中国の故事にあやかた。この「菊綿」の慣習が『紫式部日記』に記されている。

平安貴族は、日本独自の菊の行事を生み出した。重陽の節会に歌を読み合わせた、菊合せと呼ばれる「歌合せ」である。時代は移り、室町時代になると日本の菊は大きな転換期を迎える。池坊専慶が寛政三年（一四六二年）菊を折って瓶に挿したとある。生け花が発展していくこの時代の一端でもある。

江戸時代になると、五節供のなかでも、もっとも公的な行事になり、武家はこの日、菊の花を浸した酒を飲み祝った。民間では、粟ご飯を食べる風習があった。

明治時代以降、これらの風習は少

しずつ薄れていく。こんにち、この日に菊にちなんで、各地で菊の品評会が開かれている。また、ちょうど稲の刈り入れの頃なので、庶民の間では秋祭りと一緒に祝うことが多かった。この日を尊んで、地方によれば「御九日」と称して、祭礼を行う神社も少なくない。

注1「菊酒」…日本の菊酒は中国のよいうな菊酒ではなく、インスタントに酒の中に菊の花を浸しただけであったため、この風習は長くは続かなかつた。中国では、実際に菊花を用いて酒を造った。菊の花弁、茎、葉っぱを採り、黍（きび）、米と雑（まじ）えて発酵させる。来年九月九日になって、初めて飲む。

注2「歌合せ」…右方と左方に分かれ、それぞれに菊の名所の名をつけた洲浜台（すはまだい、海中に突き出た州の形に似せて作った台）を出し、歌を競った。洲浜台としては、嵯峨の大沢池、伊勢の網代浜、逢坂の関などがあげられている。

（著者は広島市安佐地区の郷土史研究会「安佐通史会」会長。「旧暦カレンダー」普及に尽力している。）

## 海外旅行ツアー・コンダクター・エピソード⑤

### ケニア編1・「マサイ族の糞の家と 牛乳と血のカクテル」 山崎 允まこと

アフリカ、ケニア共和国のマサイ

族の村を訪問したときのことだ。「くさいなー!」、異様な臭いが我々観光客を歓迎してくれた。それもそのはず、足元には牛たちの糞が土の代わりに敷き詰められているのだ。歓迎の儀式として、バケツに搾りたての牛乳、そして牛の首に五寸釘を突き刺し、ジャーと吹き出る血を牛乳に入れて手でかき混ぜ、我々にごちそうしてくれることになった。しかし、誰も飲もうとしない。

「大切な牛乳と生の血は歓迎の証(あかし)ですから、どなたか飲んでいただけないでしょうか?」と懇願すると「添乗員さん、代表して飲んでくださいよ」と答えが返ってきた。同調するお客さん多数で、断ることができない。(よし、日本から持参した「あれ」がある)と自分に言い聞かせて、一気飲みした。テント・ロッジに帰り着くと、すぐに正露丸を飲んだ。そのおかげか、体に異常は発生しなかった。

観光客の嫌がる、でも興味がある「代表代理行為」(大げさかな?)はアマゾンでもあった。観光中に立ち寄った店の入り口で客の一人が悲鳴を上げた。彼女の足元には、この店のマスコットの約2メートルの蛇が



ウイキペディアより転載

横たわっていた。その蛇を巻いて写真に撮るのが店のサービスマンで、お客さんの要望でわたしがモデルになった。作り笑いの顔で親指立てのポーズをしながら写真に納まったのだが、あの蛇のズシーンとした重さとヒンヤリした感触は消えることなく、今でも蘇ってくる。

マサイ族の家の作り方は簡単だ。円状に木を突き立てて、その先端を束ねる。小枝でメッシュ状の壁の下地を作る。最後に、牛の糞を内・外両側から丁寧に手で貼り付け、天日で干して出来上がり。村の家々は同心円状に建てられ、夜は真ん中に牛たちを休ませ、ライオンなどの外敵から護る。そして、朝になると牛たちは草を食むために村を離れるので、その場所が村の庭、社交場となる。

もちろん、牛の糞や尿のために蠅(はえ)がいっぱい! 我々観光客の顔に蠅が止まっても、叩いて殺してはいけないとガイドからきつく注意された。牛乳をもたらししてくれる牛、その牛にこびりつく蠅は大の仲良し(?)、牛は住民に乳と血をもたらすので仲良しで、蠅、牛、マサイ族とのきずなは固い。だから、蠅をパチンと叩き殺そうものなら、彼らが持っている槍で……、などと勝手に妄想

してしまう。

ガイドが言うには、観光客がドライブ中に牛の群れに会い、運悪く傷つけたり殺したりしたときは、謝ることなく一目散に逃げるのが大切である、と。仏心を起こして謝ろうとすると、何をされるかわからないからと説明を受けた。

村の近くに川がないため、村人たちは雨水のたまり場を設けて利用していた。雨が降った翌日、ひしゃく代わりのペットボトルで水を掬って、プラスチック容器に入れていた。そのすぐそばで、牛がジャーとおしっこをして、別の牛がうんちをしている。彼らはその水を煮沸して、飲み水にしているという。

マサイの男性が結婚するときは、結納金代わりに牛30頭を花嫁の父に献上する慣わしがあり、牛を用意できない男たちは一生独身を通すことになる。ガイドの説明。一方で、この村の長は7〜8人の妻を娶っていた。気の向いた奥さんの家(?)で夜を過ごすという「一夫多妻制(英語でポリガミー)」で、「奥さんたちが不満を持つことがないよう夫としての義務を果たさなければならぬ」とガイドは嫉妬を込めて説明した。

# 「恋の重荷」

高柴順紀  
(菊栽培農家)



コオイムシ(♂)の写真。これも恋の結果(重荷)なの  
でしょうか?(ウィキペディアより転載)

菊を生業にしているからだろうか。年老いていくにつれ謡曲「恋重荷」が気になって仕方がない。菊の下葉を取る老人の健気な恋の物語なのだから。

いとこの謡曲は訓えてくれるが、惨めな展開には作者の世阿弥を恨みたくなる。

物語は白河院の菊の植わった庭で始まる。庭の菊の世話をしている山科の庄司という老人が庭で時折見た

であろうか、次第に白河院の女御に心をときめかすようになったのである。正直な男だったのだろう。自分の思いを密かにとどめることが出来なかつたのか周りにわかつてしまい、老人の「しず心なき恋」を女御の知ることとなります。

しかし、憧れた女人はひどい事を命じたのである。「世の中思いが叶わぬゆえに恋というではないか。重い(思い)荷は持てないことを知らせてやれ」と。

そこで臣下は到底持ち

上げられない岩を綺麗な織物で包み、「これは恋の重荷というものだ。この荷を持ってこの庭を行き帰りすれば御姿を拝ませてあげようとの仰せである」と伝えたのである。

この話が狂言仕立てならば面白おかしく展開してめでたく終わりそうなものだが、しかしここでは夢幻能仕立てである。この恋の重荷を持ち上げ、運ぶことが出来なかつた庄司は「持てども持たれぬ、そも恋は何の重荷ぞ。よしや恋死なん。乱れ恋になしておもいしらせてやる」と恨みながらむなしく果てるのであった。そして、果てた庄司は怨霊となって再び女御の前に現れ、恋の恨みを果たすべく、懲りたまえ、懲りたまえ、と女御に自分と同じ苦しみを与えるのである。

だが、恋した男はあくまでも弱いのか。恨みを果たしたのかどうかも分からない間に、すぐさま後世を吊つてくださるなら霜か、雪か、あられのごとく消えてしまいましょ。そして、あなたの守り神となって千代までもお守りしましょうと約束して女御の前から消えるのである。

「菊」につられて観たこともない能の世界に入り込んでしまったが、能を愛する人たちはこのあつさり終

る「恋重荷」をどう理解されているのだろうか。自分には惨めな庄司の姿しか見えないのである。

げに男はつらい。恋が叶っても、世の御仁の平均年齢は奥方よりはずい分と短い。原因は、恋の重荷に耐えられなかつたからと言えようか。

《参考文献》  
『日本古典文学大系40 謡曲集上』(岩波書店)

## 徳岡政暁 陶芸作品コーナー

陶芸家、画家(徳岡佛性坊)として多彩な活動をしてきた故・徳岡政暁氏の陶芸作品の展示販売を、どら書房の一角でしています。

茶碗や花器、陶板や料理皿、多様な作品を展示しています。あなたのお気に入りの逸品が見つかるかもしれません。

※天井が低いので頭上注意!

# 通本屋 広島



## 広島 蔦屋書店

本屋さんが町から消えていく。

広島を中心である本通りにもかつてはたくさん本屋さんがあったが、現在は1件も残っていない。町の商店街にたくさん本屋さんがあった頃のような賑わいを復活させたい。

本屋さんがたくさん並ぶ商店街「本屋通り」を作りたい。

若者の読書離れという言葉が取り上げられてから随分長い年月が経ちました。

しかし「本」「読書」というカルチャーは決して滅んではいませんし、現在でも若い人たちは本を読み、さらには本を書き、Web上でそれを発表する人たちも多くおられます。

ですが、本を読む以外のたくさんの娯楽がある現在、やはり読書をする人たちの数は減っているのもまた現実です。読書をする人が減れば、本屋さんの売上が落ちてしまって、商売を続けられなくなるお店が増えてしまうのは必然です。読む人が減るという大きな問題と共に問題なのは、本屋さんの減少です。商店街にたくさん本屋さんがある、という景色は失われつつあります。それは危機的な状況だと思っています。

私たちは町に本屋通りを取り戻すための第一歩として、広島 蔦屋書店に本屋仲間を集めて小さな本屋通りを作りたいと思いました。チェーン書店、独立系書店、古本屋さん、ブックカフェ、本が好きな人、図書館、などなど本を扱う、そして本が好き、な私たちに垣根はありません。みんなで「本」を盛り上げましょう。

そしてこの春ついに本屋さんが集まるイベントを開催することが決定しました。中四国各地から30を超える書店が集まります。様々な本屋さんが並び、個性的なセレクトや直接店主とのやりとりが楽しめれます。飲食店も出店し、トークイベントやブッククロッシングも開催します。本好き、本屋好きの方、あるいはそうでもない方も、ぜひご参加ください。

本屋通りで皆様のお越しをお待ちしております。

日時：2022年5月1日（日）10:00～17:00

会場：広島 蔦屋書店

出店：廣文館 フタバ図書 ウィー東城 岩永書店 本屋アンラウン READAN DEAT 本と自由  
古本と珈琲 檜 nice nonsense books ホリデイ書店 甘茶書店 マハ書店 椿古本店 エムズ☆  
SAIKI 三帆堂 神鳥書店 古本三ツ矢 451BOOKS 古本斑猫軒 Satellite 句読点 音鳴文庫  
冬營舎 あすな書店 雨と夢の本屋 こりおり舎 本の轍 螺旋 TUG BOOKS 汽水空港 アカゲ  
ラブックス（順不同）

主催：広島 本屋通り実行委員会 TEL 082-501-5111（広島 蔦屋書店）

## どろくろ俳壇&歌壇

※参加を歓迎します。

啓蟄やせつかち虫と呑気虫

近藤 昌平

手に触れて若葉ヒイラギの棘優し

富久光

水嵩の増えしダム湖や燕飛ぶ

片岡 正人

冬越しのたまねぎの芽の逞しさ

隆愚

両手上げ駆け来る童春の土

大槇 三代子

野仏や春光遠くウクライナ

赤川 冬人

からっ風吹く吾が住む町も春寒く

松岡 初枝

平和破れし遠つ国思ふ

## 投稿&寄稿

候のことば

「雁風呂」

隆愚

青森県津軽地方に伝わる民話にもとづく春の季語。

秋に雁が海を渡ってくるとき、海面に浮かべて休むための小枝をくわ

えてきますが、浜辺にたどりつくとその枝を落とします。次の春には同じ枝を浜辺で拾って北へ帰るはずが、浜にはまだ残った枝。それは、冬の間亡くなった雁のもの。浜の人は供養のために、その枝で焚いた風呂を旅人にふるまったのでした。雁風呂や生木のやうな父の躰(すね)

柴田千晶



「ユーチューブ」赤川仁洋

テレビを見なくなっても何年も経つ。リアルタイムでスポーツ観戦できないのは残念だが、他は不便を感じない。そして、インターネットのユーチューブがある。百花繚乱、さまざまな動画が公開されている。短いので、店番しているときに見るのにちょうどいい。来客があれば中断して、一人になればその続きを見る。

今、はまっているのが楽器もの。

街角や駅の構内、建物の片隅等に設置されているストリートピアノ。誰でも自由に弾くことができる。そこにぶらりとユーチューバーのピアノリストが立ち寄って、超絶技巧の演奏で観衆を驚かせる。ピアノスト同士のコラボも盛況で、一台のピアノを二人で弾く連弾は、即興とは思えないほどの迫力で、演奏者も楽しそうに躍動しているが、見る当方も自然と身体を揺らしている。

街角ギターというのもおもしろい。街角に一台のギターを置いて、通行人が弾いてくれるのをひたすら待つのである。忘年会帰りの酔った会社員が、ギターの弦やボディを叩いて演奏する圧巻のハーレム奏法を披露する。やらせもあるのかもしれないが、これなら自分が楽器を演奏できなくても動画が制作できる。

専門家がチェックすると、ミスや物足りない部分があるのだろうが、そうしたコンテストでプロになれなかった演奏者が、ユーチューブで活躍している。型に嵌らない自由で奔放なパフォーマンス、テレビが苦戦する理由がよくわかる。それにしても、あまり見すぎると、せっかくテレビを断捨離した意味がなくなってしまう。

# どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など  
情報掲示板です。

- **一 硬式テニス参加者募集 一**
- MTEC (Miyoshi Tennis Enjoy Club)
- 場所：三次運動公園の屋内&屋外コート
- ・ 火曜日 (9:30 ~ 12:00)
- ・ 水曜日 (9:30 ~ 12:00)
- ・ 土曜日 (10:00 ~ 12:00)
- 連絡先：中川 (☎070-8991-1682)



## 《情報&原稿を募集します!!》

- 仲間募集
  - 教室&講座案内
  - イベント情報
  - あなたの大切な本の紹介
  - ボランティア・ライター(現地記者)募集!
- ※応募先はどら書房・赤川まで。  
掲載は無料です。

## どらくろあ ホームページ

バックナンバーも掲載して  
いるので、ダウンロードして  
お楽しみいただけます。



<http://shobara.wix.com/dorakuroa>

## 新屋まり歌会「春爛漫」



日時：4月24日(日) 午後2時開演  
会場：萬福寺(庄原市是松町227、0824-72-0292)  
ゲスト出演：二代目・辻村寿三郎  
入場料：2,000円  
主催：オフィスめろな一む(090-5699-4013 佐々木)  
「北広島町在住のシンガーソングライター、新屋まりと辻村  
寿三郎の人形舞いの初めてのコラボです。  
互いの感性が融和する未知なる世界をお楽しみください。」

## まちの古本屋さん どら書房

古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

- ・ 無料本、百円本、50円本などのコーナー。  
無料の漫画ルームもあります。
- ・ 地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。
- ※九日市の開催日は定休日でも開店します。

- 庄原市中本町 2-1-10
- 定休日：毎週月・火曜日(2月は店内整理で全休)
- TEL: 090(9913)3052
- 営業時間 9:30 ~ 18:30

※広島銀行庄原支店の手前(三次側から)※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

## 編集後記

◇今月号は寄稿が多くて、本誌では最多の16ページ。こうした増減が可能なのが、手作りの便利なところですね。今月号より、7年目に入ります。

◇「広島本屋通り」、どら書房にも参加の依頼があったのですが、古本屋を独りで運営している現状では無理と判断、本誌で応援させていただきます。本好きの方は是非、出かけてみてください。

◇桜の季節ですね。今まで回った芸備線の桜の名所を再訪したいと思っています。隠れた桜処がたくさん！  
◇ウクライナ紛争、ニュースを見るたびに胸が痛みます。ロシア国民も含めて、世界中の平和への祈りが実を結びますように。

発行：どら書房  
〒727-0012  
庄原市中本町 2-1-10  
☎090(9913)3052(赤川)  
e-mail: touzin@nifty.com

誌面デザイン: ROUTE183  
協賛: 九日市愛好会

第 247 回

# しょうばらくんちいち 「庄原九日市」

令和 4 年 4 月 9 日 (土) 9:00~13:00

## 庄原九日市とは？

天正年間(440年前)に物々交換で始まった市(いち)

昭和年代の戦争で途絶えていた市を、市街地活性化ボランティア活動として空き店舗などを活用し2001年に復活

## TOPICS

★市民ギャラリー「アート多愛夢」

4月8日(金)~4月10日(日) 10:00~15:00

ちくちくはうす玉手箱(着物リメイク)

★どら書房→休憩所あります!!

月曜日と火曜日はお休み

但し、九日市の日は営業します。

★楽笑座「まかない食堂」中止

「うた声喫茶」 開催 13:30~15:00

★きくや→総菜とお寿司の店頭サービス!!

★風龍→九日市スペシャルで餃子200円!

★カフェクラウド→タピオカドリンク100円引き

九日市特製ピタサンド600円

★HONMACHI STAND→コーヒー100円引き

## 出店配置図



出店申込みは、【毎月20日締切】コンパネ1枚スペース1,000円~ 九日市愛好会事務局  
〒727-0013 庄原市西本町2-1-10 楽笑座内 TEL/FAX 0824-72-8285

ホームページ  
<http://www.kunchi-ichi.jp>

